

## Ⅱ 荏本先生に贈ることば

### ■「余人をもって替えがたい凄い人」 荒巻照和さん

(会員番号：068 だるま顧問 元横浜市消防局予防部長 横浜市磯子区)

市民レベルの「防災塾・だるま」が長年継続・発展し活動できてきたのは、ひとえに荏本先生がその中心に居られたからです。このことについては、厳しいコメントで有名な名古屋大学の福和伸夫先生も、お会いする度に高く評価されていました。



荏本先生との関わりは、私が横浜市危機管理室勤務当時から始まり、早いもので約20年が経ちました。何よりも荏本先生の思慮深さと温厚誠実なお人柄で長年続いてきたと考えています。

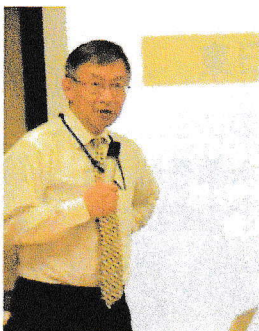
また、2018年2月に3泊4日で行った南海トラフ地震の災害履歴等調査研究で、荏本先生と佐藤孝治先生の「四国・九州調査活動」にご一緒させて頂きました。特に火山噴火活動で形成された日本一の柱状岩「馬ヶ背」の現地で、貴重な地質学の個人講義を受け、荏本先生の豊富な知識量の凄さをより実感したことを鮮烈に記憶しています。

大学の先生で市民防災に関わる多くの方々は、市民防災についての研究などと違う目的で活動されています。これだけ長きに渡って市民目線で直接関わる大学の先生は、圧倒的に少ないと思っています。この点を勘案して、福和伸夫先生が高く評価されています。

これが、荏本先生に対して常に持ち続けていた私の根底です。

### ■「被災現場観察が私の原点に」 上原美都男さん

(会員番号：006 だるま顧問 元横浜市危機管理監 東京都西東京市)



この度、「防災塾・だるま」の塾長を退任された荏本先生が、2022年3月末をもって神奈川大学を退職されるとお聞きしました。

荏本先生とは、2006年から2011年まで、小職が横浜市危機管理監をさせて頂いていた時分に、だるまの諸活動を通じて親しくお付き合いをいただき、防災活動の何たるかを、手取り足取りで御指南いただきました。

特に、2011年3月の東日本大震災の発災に伴って、2012年3月に先生を筆頭にだるまの有志諸兄とご一緒して被災地に赴き、瓦礫が片付けられずそのままの被災現場数か所を、無言で観察するという貴重な経験をさせて頂きました。この実地の体験が小職にとって、以後の災害の本質を理解する上で大きく力になり、その原点となったと言っても過言ではありません。

その後も、小職が横浜国立大学ならびに千葉科学大学において危機管理学及び災害対策論で研究と教鞭を取るにあたり、先生の研究と活動の成果を、機会ある毎にご丁寧にお教えいただき、多くを参考にさせて頂きました。

ここに、ご退職の後も末永くご交誼いただくとともに、益々ご健勝で防災にご活躍されることを祈るものであります。

■「地域のため、社会のため働き続けることが求められています」 佐藤孝治さん

(だるま顧問 神奈川大学名誉教授 神奈川県川崎市)



荏本先生とは 1996 年春、前年の阪神・淡路大震災に関する連続講座を企画した際に初めてお目にかかったことをよく覚えています。そして、2005 年度からの学術フロンティア研究プロジェクトや 2011 年からの大規模災害対策研究プロジェクトで多くの現地調査にご一緒し、2011 年から始めた防災講演会の企画や講演に共同で取り組んできました。

その間に議論を繰り返すことで新たな知見を獲得し、後に論稿に発展したものもありました。分野横断的な研究調査に忍耐強く対応していただいたことに深く感謝申し上げます。荏本先生へ「定年お疲れ様でした」と申し上げたいところですが、自然災害の多発によって地域のため社会のために働き続けることが求められているのではないかと感じています。

そこで、私が法学部生の頃に強い感銘を受けた経済学者・高野岩三郎の伝記からの言葉を贈る言葉とします。

「いずれにしろ、高野岩三郎は何ものかに駆りたてられるかのように、休みなく働いた。もはや年老い、口もよくきけないほど肉体はおとろえても、「これから、これから」と明日への希望をすてなかった。彼こそはまさに「一国を興す人」であり、つねに何事かを為して民衆とともに永遠に生きようとする不屈の魂であった。」(大島清著『高野岩三郎伝』439 頁)

■「貴重な機会と刺激をいただきました」 杉原英和さん

(会員番号:049 だるま顧問 元神奈川県防災センター所長 横浜市保土ヶ谷区)



神奈川県庁に入って、早い段階から調査事業、とりわけ地震被害想定調査事業には先生から知見をいただきました。上司であった先輩先生から荏本先生をご推薦いただき、その縁で長い間県の仕事をお願いしてまいりました。

また、東日本大震災が発生した時には、私が温泉地学研究所に居たという動きやすい立場でもあったため、震災調査に誘っていただき、同行させていただきました。そして、まだまだ津波の被害が生々しい現場を調査させていただきました。その時見た津波被害でボロボロになった防災庁舎や、陸に上がった漁船の光景は頭の中から離れることはありません。その際には、内陸での調査も記憶に残りました。仙台市の緑が丘団地という丘陵地に開発された団地で 1978 年の宮城県沖地震の際に地すべりの発生したところを、調査に行きました。やはり、再度被害が発生していることが確認でき、造成宅地の課題が市民の生活に与える影響を目の当たりにしました。自然を改変する場合には、細心で最大限の対策を行わないと、将来に課題を残すことをしっかり認識しました。この造成団地の被害はマスコミにはあまり注目を浴びていなかったかもしれませんが、震災は内陸でもあったことを実感しました。

私が温泉地学研究所に居た時には、さらにスペインやメキシコのワークショップにも連れて行っていただき、大変な機会と刺激をいただきました。英語で県の地震被害想定調査の発表をするのは、大変緊張する時間でしたが、貴重な経験もできました。また、スペインでは松田磐余先生や瀬尾先生、ラヒミアンさん達とグラナダ大学を訪問するなど大変有意義で楽しい時間を過ごしたことが、思い出になっています。

長い間防災塾・だるまの塾長として、民の防災力向上に貢献されてきたことは、大変頭の下がる活動だったと思います。何回か私もお話をさせていただく機会を得て、いつも役所の枠の中にはまっているストレスを発散させていただく機会を与えていただきました。

今後も引き続き後進の方々の育成などご活躍を祈念しております。早く新型コロナウイルス感染症が終息して先生とまた飲みに行ける日を待ち焦がれております。

## ■「みんなの声をじっくり聞きながら」 中川和之さん

(会員番号：097 だるま顧問 時事通信社解説委員 横浜市栄区)

阪神大震災の地震直後から、つながりが増えた私の神奈川県内の濃い防災人脈で考えると、私が荏本先生に出会ったのはだいぶ後のことでした。それは、防災塾・だるまがスタートした2006年、神奈川大学の「実践的防災まちづくりコーディネーター養成講座」についての相談を受けたときだったと思います。最初は、1コマを担当すると言う話だったのか、講師候補の相談だったのか、もう忘れてしまいました。ただ、



しょっぱなから『実践的防災まちづくりコーディネーター』とはなんぞや、養成してどうするか」などと議論をふっかけ、荏本先生を困らせてしまったようです。

阪神大震災後、ボランティアのコーディネートが課題とされ、雨後の竹の子のようにあちこちで「災害ボランティアコーディネーター養成講座」が開設されました。日頃の地域活動もせず、聞きかじった知識と熱い思いだけで、「コーディネーターです」と言って現場に現れ、混乱を拡大させる人たちが少なくなかった時期がありました。そんな間違いをまた新たに増やすのか、と思ったのです。自分の研究に防災テイストを振りかけて研究費を取りにくる「防災バブル」な研究者も少なくないなかで、またか、とも思ったからでした。自分のことを棚に上げて、よくぞまあ偉そうにと、思いますよね。

ところが、私がふっかけた議論に対して、ご自分の考えを押しつけようとはせず、なんとか世の中にとって良い講座にするためにどうしたら良いかと、真摯に私の話を聞いていただけた記憶があります。そこから長いお付き合いが始まりました。

荏本先生は、阪神大震災以前から、建築防災、特に地盤を専門に耐震工学の研究をされ、理的分野と社会とのつながりの欠如に気づいておられたのでした。そして、あの1995年1月17日の早朝、日米都市防災会議のために訪れていた大阪のホテルで地震に遭遇。その日のうちに神戸入りし、地震被害の激しさに打ちのめされていたことも知りました。私が17日深夜、郷里の変わり果てた姿を目の当たりにしたように。

その後の進め方が、荏本先生ならではなかったのだと、今は分かります。県内の熱い人たちの声をじっくり聞きながら、つながりを拓けてこられて、今に至ったのです。考えてみれば、専門は「地盤」です。ぜひ今後も、みんなの声をじっくりと聞き、県内の「防災地盤」を改良していく役割を果たしていただきたいと願っています。

■「阪神淡路大震災からの強い思い」 松山順三さん

(協力者 元兵庫県神戸市職員 兵庫県三木市)



25年前、あの近代的な美しい神戸のまちが、一瞬にして廃墟のような姿になってしまいました。

荏本先生は、あの地震によって多くの家屋や橋、構造物が壊れた姿を見て、建築学をリードする学者として悔しい思いがあったと思います。そして、二度とこのような被害を被ってはならないとの強い思いから「だるま」を立ち上げられました。

まちが近代化し、河川整備や護岸整備が行われることで人々の生活が守られてきましたが、そのことで人々の防災意識を無防備にしまったように思います。

地震多発国、日本において、過去の災害から学ぶことの必要性を「だるま」を通して人々に訴え、防災の基本、自然災害の教訓を伝承していこうと考えられたと思います。

災害から人々を守り、住みよい安全なまちには災害に強いまちが必要です。

先生が25年も前から訴えられてこられた「災害の本当の怖さ」を、これからも伝承していくことが、先生のご努力への感謝だと思っています。

(注) 阪神淡路大震災下 神戸市職員として、災害現場に立ち辛酸をなめた。2006.1.17の第1回目の「1.17のつどい」の参加から毎年神戸での交流が続いています。また第1回目の養成講座他の講師として協力頂いています。

■「荏本先生とは防災都市づくりの同志です」 岩楯敬広さん

(会員番号：235 東京都立大学名誉教授 横浜市港南区)

15年の長きに渡り、防災塾・だるま塾長として、市民の皆さんと共に「防災都市づくり」に邁進されたことに、敬意を表します。

荏本先生と私は、東京都立大学土木工学科出身の同窓生(岩楯:1968年卒、荏本:1974年卒)で、私が1994年4月に母校都立大学に奉職以来約30年に渡り、専門分野(地震工学、都市防災)



が同じ大学人として、学生の教育・研究と共同研究活動を行ってきた同志です。

二人の最初の共同研究活動は、私が都立大学に奉職した94年6月、故国井教授（私の先輩で荏本先生の恩師）が遺品として残された地震計を逗子市の表層地盤に設置し、地震観測を開始して「逗子地域の表層地盤の地震応答特性に関する研究」をスタートした時です。1995年1月には、阪神淡路大震災の地震被害調査を発生直後に、さらに同年7月には被災地域の表層地盤で、常時微動観測（荏本先生のライフワークの一つ）を一緒に行い、地震被害と地盤の応答特性との関連について調べました。

その後も先生と私は、平成年間に国内外に発生した多くの地震（東日本大震災、熊本地震、2001年のインド西部地震等）の調査を一緒に行い、これらの研究成果を学会や国際会議に発表することを通して、学生教育や防災まちづくりに反映しております。

また、スペイン・アルメリーア大学との国際共同研究も積極的に進められ、アルメリーア市の地震防災に貢献されました。さらに、東京都立大学と中国上海交通大学との国際共同研究にも、メンバーとして参加され、日本の都市防災対策を紹介する等、国際的にも活躍されております。

最近では、東京都立大学オープンユニバーシティの社会人教育の場で、私が「防災塾・だるまの活動について」の講演をいたしました。さらに、現在、私と荏本先生とは、神奈川大学の「地盤環境研究会」や東京都立大学土木会OB会等を通して、研究交流を続けております。

そして荏本先生が、神奈川大学での40年余に渡る学生教育・研究活動により培われた地震防災に関する経験や知識を、次世代を担う後進に伝え継承されることを切望します。さらに「防災塾・だるま」の名誉塾長として、「防災都市づくり」に一層尽力されることをお願い致します。

#### ■「これからも精進して先生のお手伝いを」 落合 努さん

（会員番号：234 神奈川大学工学部建築学科 助手 横浜市泉区）

私は荏本研究室で先生から20年以上ご指導をいただいておりますが、荏本先生のお人柄が伝わるエピソードを1つ挙げさせていただきます。

「防災塾・だるま」発足のきっかけに文部科学省のプロジェクト研究があります。防災に携わる研究者が国などからプロジェクトを任された場合、大学内に新たな研究施設を建てたりすることが良くあります。しかし、荏本先生は地域の方々と一緒に防災を進める「防災塾・だるま」を設立されました。そしてだるまの活動は先生の防災への取り組み姿勢や人柄を良く反映している事柄と感じていますし、私も「防災塾・だるま」に入会しました。

今後も大学やだるまで引き続きご指導いただくとともに、一人の研究者として微力ながらもお手伝いができるように精進いたします。



## ■「自分の地域で被害を出さない」 渡辺 渉さん

(神奈川新聞社報道部記者)

「荏本孝久教授」。社のデータベースで検索すると、60本以上の記事が見つかった。当然ながら、その大半を私が書いていた。

最初は2007年9月。「実践的防災まちづくりコーディネーター養成講座」の告知記事だった。その初回を取り上げた後日の記事では、荏本教授の講演をこう表現している。「(荏本教授は)少子高齢化や都市化などで助け合いの意識が低下し、地域の防災力も弱まっている点を指摘。多様な生活環境を持つ人たちのネットワークが果たす役割の大きさを説き、『自分の地域で被害を出さないという意識が全体の被害も減らす』と強調した」

以来、15年近く、当時指摘された課題は今も変わらず、むしろ難しさを増している。だからこそ、「だるま」のような取り組みが大切と思い、取材を通じて学ばせてもらっている。

手探りで続けてきた弊紙の「減災新聞」も、10年を超えた。東日本大震災、度重なる風水害で取り上げるテーマが広がり、正直、カバーしきれないが、少しでも備えにつながる記事を書き続けることができたいと思っている。そのヒントを提供できた時にはきっと、「荏本孝久名誉塾長」の記事が数多く出ているだろう。



## ■「防災の人と智をつなぐ要は荏本先生」 高梨成子さん

(協力者 (株)防災&情報研究所代表 東京都中央区)



荏本先生には、2013年からの文部科学省の地域防災対策支援プロジェクトと、2016年からは“かながわ人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク”の代表をお願いして来ました。多様な研究者や団体等が参画した防災・減災ワークショップ等の充実した活動が展開できたのも、熱量の高い防災塾・だるまの方々のお力添えと、荏本先生という人徳あるリーダーに恵まれたからこそでした。活動を紡いでくださった荏本先生には、感謝しかありません。

荏本先生は防災塾・だるまの塾長を退任されるとはいえ、助言等は続けてくださるとのことですので、今しばらくは、神奈川県下の防災・減災活動の活性化に、ご尽力いただきたくお願い申し上げます。